

幼児の人との関わりを育むための実践と評価方法

—臨床乳幼児への情動調律から—

大鐘 啓伸

Practice and Evaluation Method to Nurture the Relationship with the Infant — From Affective Attunement of the Clinical Infant —

Hironobu OGANE

I 問題意識と目的

Stern (1985) は、乳幼児とその母親の関係性についての援助に関して、情動調律 (affect attunement ; Stern, 1985) を適用することが重要であることを示している。情動調律は、母親が乳幼児の内的状態にマッチしようとするものである (Stern, 1985)。また、意図的に母親が乳幼児の活動レベルや情動レベルを上げたり下げたりすることで、乳幼児の起こっている調律の感覚を壊さない程度に、乳幼児の行動を変えることによって、母子の情緒的相互交流を発達的に促進させる (森, 2009)。この母子の関係性の援助に適用される情動調律は、幼児教育や保育の場面に活用することで、幼児教育・保育職 (以下、「保育者」と略記) と幼児との二者関係における情緒的相互交流を促進することが期待される。このように情動調律は、乳幼児が人との関わりを育むうえで重要な要因と言えるであろう。しかし、幼児教育・保育場面は、保育者が乳幼児に対して様々な関わりをすることで、乳幼児の発達を総合的に促している。そのことは、保育のこの部分が乳幼児のこの部分の発達を促すというような構造化された設定が幼児教育・保育場面において行なわれていないということである。そこで、構造化されていない幼児教育・保育場面においても、情動調律が保育者と幼児の二者関係を形成するものであることを、幼児の人との関わりを育むための実践と評価から検討する必要がある。

構造化されていない幼児教育・保育場面において情動調律を役立てるうえで、一般的な乳幼児の発達や行動を理解していくための観察対象としての乳幼児を被観察乳幼児 (observed infant ; Stern, 1985) とし、行動上のことで課題がある乳幼児を援助の必要な臨床乳幼児 (clinical infant ; Stern, 1985) として、この両者を対比することが必要である。森 (2009) によると、この両者の対比することによって、乳幼児の他者との相互交流や情緒的理解を解釈するとともに知的洞察ができ、援助に役立てることが指摘されている。

被観察乳幼児は、新生自己感 (sense of an emergent self), 中核自己感 (sense of a core self), 主観的自己感 (sense of a subjective self), 言語的自己感 (sense of a verbal self) の4つの自己感を形成する (Stern, 1985)。それら4つの自己感は、時間的連続性をもって形成し、それぞれがかかわり合いの領域 (domains) として作用させていく (Stern, 1985)。特に、主観的自己感における間主観的にかかわり合いの領域で作用する間主観性 (intersubjectivity) は、情動調律のほかに、社会的参照 (social referencing ; Emde et. al, 1983), 共同注視 (Collis et. al, 1979), 他者の意図を読むこと (Trevarthen, 1979) など、心理的現象という共有できる世界を構成しているものは何であるかについての、親と乳幼児とのやりとりである (Stern,

1985)。同じ期間に、愛着 (attachment ; Bowlby, 1969) に関することがある。Stern (1995) によると、親子の分離・再統合の行動によって生じる感情など、親と乳幼児が共にあることに関する愛着パターンは、親子関係の質を予測する指標の一つとして、特徴的な表象を形成していく。

このような乳幼児の自己感の形成やかかわり合いの領域の作用は、構造化されていない環境の中で発展していくものである。そうすると、幼児教育・保育場面における構造化されていない環境の中で、被観察乳幼児と臨床乳幼児を対比して情動調律を活用するということが、保育者と幼児との関係性を促進させるとともに、幼児の人との関わりを育むための実践と評価に繋がるであろう。

本研究では、筆者が実践したA幼児教育センターでの課題のある幼児への関わった事例を考察することで、主にSternの理論に基づく心理臨床が、幼児の人との関わりを育むための実践と評価について有用であるかを検討する。なお、今回、提示する事例は、いくつかの実践のうち、臨床乳幼児が主観的自己感における間主観的にかかわり合いの領域で間主観性を作用することによって、筆者がその幼児と共にあるという感覚をもって関わることの重要性を体験し、そのうえで評価を行ったものである。

II 方法

1. 実践と評価方法のための概念化モデル

本研究における幼児の人との関わりを育むための実践と評価は、Stern et. al, (1989) の母親・乳幼児関係における動的相互交流を分析するために概念化したモデルのひとつを応用している。このモデルは、母親と乳幼児の関係性を促進するために、母親と乳幼児の行動と表象を包括的に取り扱う心理教育的アプローチである。Stern et. al, (1989) は母子の相互関係を四つの主要要素から図式化している (図1)。一つ目の要素は、乳幼児の相互交流の行動 (BI) である。二つ目の要素は、母親の相互交流の行動 (BM) である。この両者は相互交流している (BI⇔BM)。三つ目の要素は、この相互交流についての母親の表象 (RM) である。四つ目の要素は、同じ相互交流についての乳幼児の表象 (RI) である。BIとBMは相互依存関係にある。四つの要素は絶え間なく動的な相互交流を展開しており、相互依存のシステムを形成している。

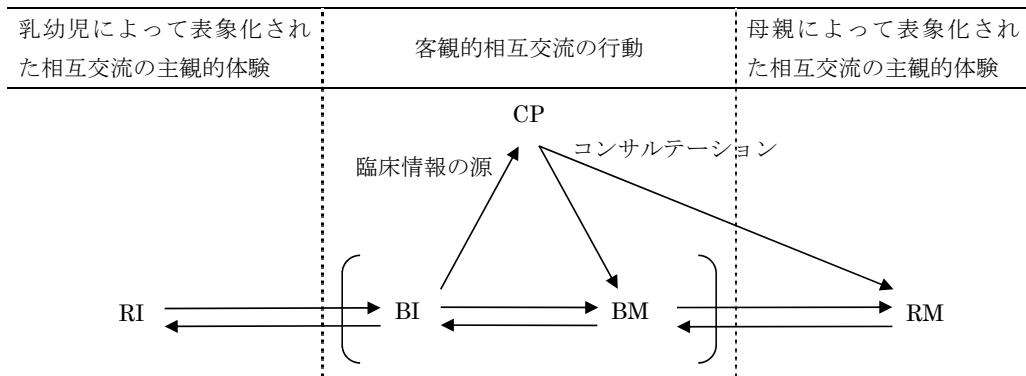


図1 行動と表象の間における動的相互交流のモデル (Stern・Stern, 1989) を活用したCPにおける心理教育的アプローチ

※ CP (Clinical Psychologist) : 臨床心理士, BI (Behavior of Infant) : 乳幼児の行動, BM (Behavior of Mother) : 母親の行動, RM (Representation of Mother) : 母親の表象, RI (Representation of Infant) : 乳幼児の表象。

幼児教育・保育の場面において、保育者と幼児との関係性を形成することに課題が生じている場合、Stern et. al. (1989) のモデルを応用して、保育者と幼児との二者関係を包括的に取り扱うことは、母親と乳幼児の関係性を促進するために母親と乳幼児の行動と表象を包括的に取り扱うという心理教育的アプローチと同様のことである。つまり、母子関係を保育者と幼児との二者関係に置き換えて心理教育的アプローチを行うことによって、保育者と幼児との関係性を形成するとともに、幼児の人との関わる力を育むことになる。これが、Stern et. al.(1989) の母親・乳幼児関係における動的相互交流を分析するために概念化したモデルのひとつを用いた理由である。そこで、筆者（以下「CP」と略記）は、BIを臨床情報の源として、課題のある幼児に介入し、これをビデオカメラで記録した。そして、BIに影響を及ぼすBM, RMの変化を促すために、BM, RMを保育者に置き換えて評価を行った。この評価はビデオカメラの記録を再生して行った。

2. 実践と評価方法のための原物語封筒

CPは、幼児と関わるために、Stern (1995) の“原物語封筒 (protonarrative envelope)”の理論を援用した。また、原物語封筒による幼児の理解は、幼児の人と関わる力の評価においても活用した。

Stern (1995) によると、乳幼児の主観的に構成される周期には、出来事に時間の始まりと終わりがある。その周期のそれぞれに感情形態があり、動機の展開を区切っている。その周期のそれぞれを一つの封筒 (an envelope) と呼ぶ。そして、それぞれの封筒はそれぞれ異なる感情形態で曲線的につながっており、この異なる要素によって形成される時間的パターンの集まりが原物語封筒である。

CPは、この理論によって一連の幼児の行動や感情形態を一つ一つの封筒に区切り、それぞれの封筒にある幼児の表象について解釈や洞察を援助に役立て、保育者が幼児の行動と感情や関わり方を理解するために活用した。この方法によって、保育者が幼児の発達の状況や課題を把握するうえでの視点を提供し、幼児の行動と表象とそれに関わる心理教育的アプローチについて実践指導した。

3. 幼児の感情に対する評価

ビデオカメラで記録した幼児の行動を一つ一つの封筒として区切った。一つの封筒として区切るにあたっては、CPと園長によって行った。次に、それぞれの封筒について、CP、園長、園長補佐、主任、担任が、幼児の感情の強さを評価した。評価は1から10までで点数化した（評価1を気分が沈んでいる状態、評価10を気分が興奮している状態、評価2から9まではその間の状態）。その結果から、幼児の感情形態とCPの介入のタイミング、保育者の意識されていない保育に対する感情を解釈して、幼児への関わりについて心理教育的アプローチを実践指導した。

4. 倫理的配慮

本事例を研究論文として発表するにあたり、個人情報匿名性などプライバシーに配慮し、関係者全体に与える影響を考慮した表現など内容を工夫することで、保護者およびA幼児教育センターから同意を得た。

Ⅲ 事例

1. 対象児の概要

A幼児教育センターに通うBちゃん（女児、2歳8か月）は、言葉がでない、じっとしてい

なくて、いつも走りまわっている。保育者の指示に従わない、保育者や他の園児とコミュニケーションできない。保育者はBちゃんの保育に困難を感じ、Bちゃんがみんなと同じように園生活ができるようになるためにどうしたらよいかということから、CPにBちゃんの対応についての相談を求めた。Bちゃんの保育記録には、1歳6か月児健康診査で広汎性発達障害の疑いと診断結果が記されていた。また、この記録には2歳6か月の時にA幼児教育センターで実施された遠城寺式乳幼児分析的発達診断検査（遠城寺ほか、1977）による発達指数が51で、移動運動、手の運動は年齢相当の発達段階であったが、基本的習慣、対人関係、発語、言語理解に顕著な遅れが示されていた（図2）。CPは、以上の情報に合わせて、対象児を観察しながら関与した。なお、保育現場の即応したニーズに対応するために、相談に伴う指導は数回程度で、対象児への関与の内容を保育者に示すものであった。今回の事例は1回で、CPの一連の行動に園長は随行した。乳児クラス担任はビデオカメラでBちゃんを撮影した。撮影時間は、午前の遊び後の休憩時間のうち12分42秒であった。以下は、ビデオカメラに撮影された概要である。

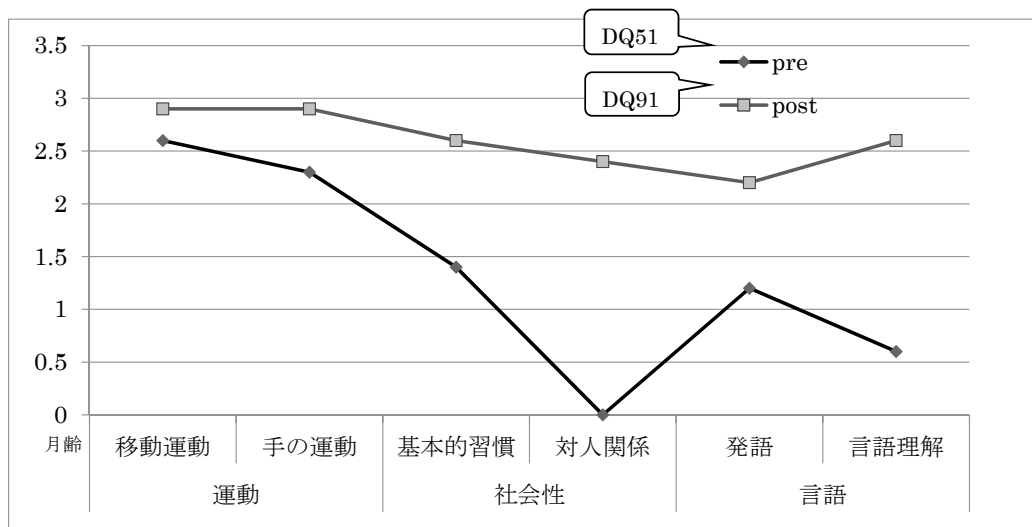


図2 Bちゃんに共感と応答によって関わった前後に実施した遠城寺式乳幼児分析的発達診断検査結果のプロフィール

注) pre: 介入前 (2歳6か月) のプロフィール, post: 介入後 (2歳9か月) のプロフィール, DQ: 発達指数

午前の活動の休憩時間、ここに通っている幼児たちは椅子に座ってお茶を飲んでいて。Bちゃんは部屋の中を走り回り、時々、おもちゃ箱の中のものをいじるという感じで触るが、すぐに走り回った。途中、急に止まって、ホワイトボードの上にくっついている赤い花の小さなマグネットを見詰めた。保育者が赤い花を取ってBちゃんに渡そうとするが、Bちゃんは目もくれず、また、走り回った。誰かと目が合う感じはない。CPはおもちゃ箱のそばでBちゃんを観察していたところ、Bちゃんがおもちゃ箱の中をいじって、CPの方を見た。その時、CPは、小さい赤いブロックを握って、Bちゃんの目の前で握ったこぶしを広げて、その中のブロックを差し出してみた。Bちゃんは不思議そうにブロックを見てから、CPを見た。その時、はじめて目があつたので、CPはゆっくりと優しくうなずいてみせた。Bちゃんは、ブロックの方に目をやり、ブロックを手に取り、不思議そうにCPを見た。CPはBちゃんの手を優しく握った。もう一度Bちゃんは不思議そうにCPを見てから、再び走り回った。そして、また、急に止まっ

て、ホワイトボードの上にくっついている赤い花を見詰めた。CPはそっとBちゃんに近づき、「一緒にとろうか」とささやき、優しくBちゃんを抱えた。Bちゃんをゆっくりと抱き上げて、赤い花に手が届くところまで、抱え上げると、Bちゃんは、赤い花を手にとった。CPは、ゆっくりとBちゃんを降ろした。Bちゃんは、赤い花を手にしたまま、また、走り回りだした。途中、赤いブロックを赤い花と一緒に床に置くと、CPの方を見た。保育者がリズム遊びをするために声をかけると、保育者の方に近寄っていった。

2. 評価ための封筒の設定

ビデオカメラを再生し、CPと園長の二人で、原物語封筒を形成する一つずつの感情形態である封筒に区分するために、Bちゃんの行動を幾つかに区切った。封筒を区切る際に、CPと園長は、感情の起伏の始まりと終わりがどの行動からどの行動までになるかを話し合った。そして、Bちゃんの感情に対する評価のための封筒を次の9に区分した。①Bちゃんが走り回っている時。②最初にホワイトボードに赤い花を見た時。③赤い花を保育士がBちゃんに渡した時。④再び、走り回った時。⑤CPがBちゃんに赤いブロックを見せた時。⑥Bちゃんが赤いブロックを手にとった時。⑦再びBちゃんが走り回った時。⑧再びホワイトボードの赤い花を見た時。⑨CPと一緒にホワイトボードの赤い花を手にした時。

3. 感情に対する評価結果

Bちゃんの感情に対する評価の前に、ビデオカメラを再生しながら、CPが園長、園長補佐、Bちゃんの担任および主任に、封筒の意味と区分した部分を説明した。説明は、それぞれの封筒の感情の起伏の始まりと終わりがどの行動からどの行動までかということであった。その後、5名によって封筒のそれぞれについてのBちゃんの感情を評価した。評価はそれぞれの感情の起伏の始まりと終わりの間の頂点の時点について行った。また、そのように評価することによって、保育者がその行動に伴う感情の状態を相対的にどのように把握しているかを確認できるものであるということを説明した。それぞれの評価の平均値は図3のとおりであった（以下の記述は図3を参照）。Bちゃんが①で走り回っている時は興奮しており、②では赤い花を見て、

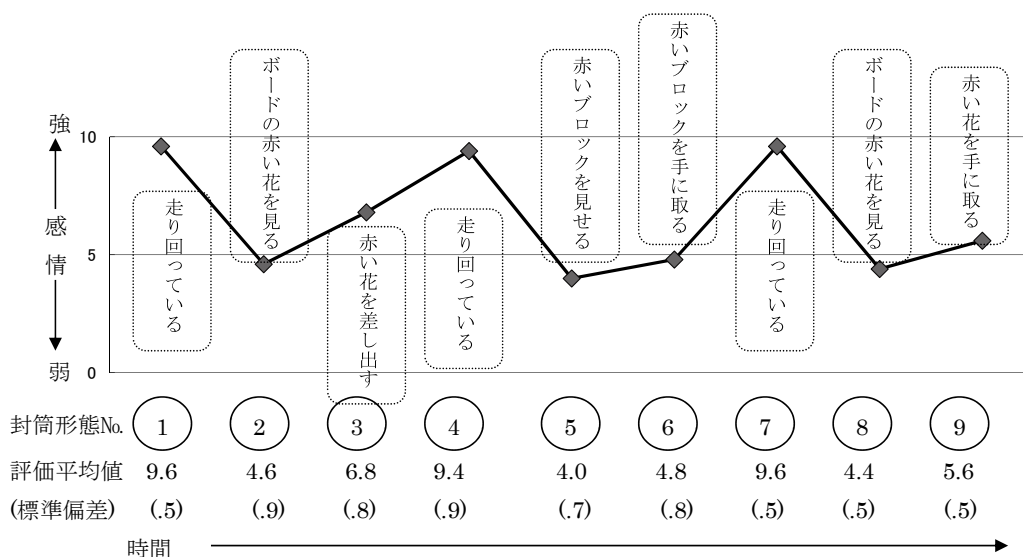


図3 Bちゃんのそれぞれの封筒における感情形態の評価 (n=5)

気分が落ちついていったが、③で保育者が赤い花を渡してもBちゃん気分は落ち着かず、④のように走り回って再び興奮状態となった。⑤で赤いブロック見て、気分が落ち着いたようで、⑥で赤いブロックを手にとった。⑦ではまた走り回って興奮していたが、⑧で再び赤い花を見て、気分が落ち着いて、⑨のようにCPと一緒に赤い花を手にしたことで、気持ちがよい状態になった。

4. 実践・評価・指導の概要

(1) 感情形態を理解すること

最初に、Bちゃんが走り回っていることに関する①の封筒の感情評価9.6、④の封筒の感情評価9.4、⑦の封筒の感情評価9.6のように、保育者はBちゃん気分が興奮していると評価していることを確認した。そこで、CPは保育者に、「Bちゃんが周囲からのさまざまな刺激を整理できずにどうしたらよいか分からないから、自分の感情と身体感覚を行動という形で表現していた」、「そのことは、Bちゃんにとって誰かと情緒的交流という相互作用が充分になされていない状態であった」、「そこには保育者とBちゃんが互いに他者の意図を読むということがなかった」、「そのような保育者とBちゃんの二者関係の質は課題のある愛着パターンであった」ことを説明した。そして、「Bちゃんが走り回るという行動に伴う感情の状態に応答できない場合、Bちゃんの感情をより興奮させたり、不安にさせたりするものになる」ことを教示した。

次に、赤い花を見ていた時の②の封筒の感情評価4.6、⑧の封筒の感情評価4.4や、赤いブロックを見せた時の⑤の感情評価4.0のように、保育者はBちゃん気分が比較的落ち着いていると評価していることを確認した。さらに、③の封筒の赤い花を差し出した時は少し興奮していると評価(6.8)していることに対して、⑥の封筒の赤いブロックを手にした時の評価(4.8)や⑨の赤い花を手取る時の評価(5.6)のように、保育者はBちゃん気分が比較的落ち着いていると評価していることを確認した。そこで、CPは保育者に、「ホワイトボードにくっ付いている赤い花の小さなマグネットをBちゃんが見ていた時に、保育者はBちゃんがそれを欲しいと思い、渡そうとしたが、Bちゃんはそれを望んでいなかったこと」、「CPが赤いブロックをBちゃんに見せた時、Bちゃんがそれを手に取ったことは、Bちゃんが誰かと共にあることを求めているということ」、「Bちゃんは、誰かに援助を求めるとのことや一定の情動の水準では共同注視も可能であったので、愛着や関主観性の形成に期待できること」を説明した。そして、Bちゃんへの対応について、「保育者がBちゃんの場面ごとの行動に対する感情形態の評価を確認し、Bちゃんの感情形態の水準が落ち着いたところで、Bちゃんに過剰刺激を与えないようにBちゃん自身のリズムを尊重しながら関わること」が必要であると教示した。

(2) CPの介入を示すこと

保育者とBちゃんがコミュニケーションを取れるようになるために、保育者がどのようにBちゃんと情動調律するかが課題であった。そこで、CPは、情動調律による介入とそれによって生じたできごとを、保育者に示す必要があった。CPは、Bちゃんの行動を区分したそれぞれの封筒の感情形態のうち、⑤の封筒の感情評価(4.0)の赤いブロックを見せた時や⑧の封筒の感情評価(4.4)の赤い花を見ていた時のように感情が落ち着いたところで、⑥の封筒の感情評価(4.8)の赤いブロックを手取る時や⑨の封筒の感情評価(5.6)の赤い花を手取る時のような介入によって、その後の「おもちゃ箱から赤いブロックをひろい、赤い花と一緒に床に置く」という「赤いブロックのCPと赤い花のBちゃんが共にある」象徴的な場面になり、Bちゃんが誰かと共にあることを体験できたことについて、保育者に説明した。そして、このような介入は、「保育者がBちゃんに何かを差し出すというのではなく」、「BちゃんとCPが

何かを介して情緒的に交流しているというもの」であり、「CPがそこでのBちゃんの行動表現に伴う情緒に調律することで、Bちゃんが誰かと共にあることを体験し、愛着や間主観的なかわり合いを促進させていくものである」と教示した。

(3) 臨床乳幼児の視点を持つこと

CPは、保育者に「幼児の誰もが新奇なものを欲しがっているという想像上の子ども(imaginary infant; Levobici, 1984)をBちゃんに見ているが、現実の子ども(actual infant; Levobici, 1984)であるBちゃんは走り回って感情を行動で表現している」と説明した。この説明で、「保育者はBちゃんが被観察乳幼児として行動することを無意識に想像していたこと」、「しかし、Bちゃんは目の前にいる現実の子どもで、心理臨床を必要とする臨床乳幼児であること」を確認し、「その対比が適切になされていなかったことが、保育者の適切な対応を阻害する葛藤になっていた」と伝えた。想像上の子どもと現実の子どもの葛藤によって生じる母子の二者関係の問題は、Levobici (1984)によって指摘されているところである。このように被観察乳幼児と臨床乳幼児を対比する視点を持つことについて教示したうえで、③の封筒の感情評価(6.8)の場面に関して、「保育者は赤い花を見ているBちゃんにそれを差し出すとBちゃんが受け取ると想像していたが、Bちゃんがそれを受け取らず、再び走り出したので、Bちゃんの行動に対してコミュニケートできないという保育への困難さを感じていたこと」を指摘した。そして、CPは、「保育者がBちゃんの直接的な行動表現から、Bちゃんが何をしたいかということを考えるのではなく、Bちゃんがいまここで保育者と一緒にどうしたいのかを考えること」について教示した。その内容は、保育者のBちゃんの感情形態の評価に対する振り返りを行うとともに、その評価に対応した行動を考えることであった。例えば、まず、Bちゃんの感情形態が走り回っている場面から、赤い花を見ている場面が変わるところの感情の水準がどのようになっていったのかを、保育者に確認するということであった。その際、保育者が、そこでBちゃんの感情の水準を「気持ちが落ち着いている」と評価した場合、その次にBちゃんは保育者とどうしたいかを考えることであった。そして、そこで保育者がBちゃんに関わることができれば、その次に続くBちゃんの行動は保育者と一緒にいることができるようになっていくと予測することであった。また、Bちゃんが走り回って心理的な興奮しているときは、保育者は穏やかに行動し、優しく声かけをするようにすることであった。また、Bちゃんが、そのような声かけに応答すれば、保育者はその応答に優しくうなづくなどの肯定的な雰囲気返してあげることであった。そのようなことが、Bちゃんの行動表現に伴う情緒に調律するということであることをアドバイスした。

5. フォローアップ(1か月後)

Bちゃんは、みんなと遊んでいた。保育者からは、走り回ることはなくなり、保育者の言葉がけに沿った生活をしているとの報告を受けた。2歳9か月での遠城寺式乳幼児分析的発達診断検査(遠城寺ほか, 1977)による発達指数が91で、言葉の数は少ないが、発語の機会を増やしていけば、会話を楽しめるようになるまで成長することが期待されるとのことであった。Bちゃんは、CPのことに気がつき近寄ってきたので、「こんにちは」とあいさつしたら、「こんにちは」と言って、少しCPの顔を覗き込んだ。保育者がBちゃんに声をかけると、みんなのところに戻っていった。Bちゃんがクラスの中で、みんなと共にあることを楽しんでいるように思われた。

園長からは、これまでBちゃんの感情のことを考えずに、保育者の望む姿となるように関わっていたが、Bちゃんの感情の起伏に気を配ることで、こちらの言葉を伝えるタイミングが分か

るようになったと報告された。また、Bちゃんの気持ちに対応するために、園長などでその都度、関わり方が適切かどうか何度も話し合い確認しあった。その間、CPには、適時、アドバイスが求められており、その都度、Bちゃんの行動表現に伴う情動にどのように調律したらよいか教示した。そうしたことから、以前のようにBちゃんに関わることに困難を感じたり、コミュニケーションがとれないといった評価がなくなった。一方で、保育者は少しではあるが会話も交わすことができているということや、保育者の指示が伝わっているという感覚があるとのことであった。それは、Bちゃんの人との関わる力が育まれているという保育者の評価であろう。

IV 考察

1. 心理教育的アプローチによって促進される相互作用

心理教育的アプローチは、まず、いまここにいる現実の子どもの行動を臨床情報の源として、保育者に示すことであった。それは、現実の子どもが心理臨床の援助を必要とするものであったが、保育者がその子どもに対して被観察乳幼児という一般的に観察されている乳幼児のイメージを無意識的に表象していたからであった。つまり、被観察乳幼児と臨床乳幼児との対比がされないことが、保育者の行動に作用して、いまここにいる現実の子どもの行動との相互作用が適切ではなかったと考えられた。従って、保育者といまここにいる現実の子どもは互いの意図を読むことができないことで、いまここにいる現実の子どもが他者とのやりとりをどのようにしたらよいか訳の分からない混乱の状態になって、不安を上昇させ、防衛的な反応という行動を強化してしまうことであった (Tustin, 1990)。そこで、CPは、保育者が心理臨床の援助を必要としている臨床乳幼児としての表象を持つために、いまここにいる現実の子どもの行動を、一定の流れのある始まりと終わりに区切って封筒とすることと、その封筒の感情を評価することを、保育者とともに行い、その行動と感情を解釈した。そのことによって、保育者はいまここにいる現実の子どもの表象を変化させ、その行動に調律することが必要であることを認識したものと思われた。そのような保育者の認識は、保育者の行動といまここにいるBちゃんという現実の子どもの行動との調律を促すものとなった。そして、保育者とBちゃんの調律は、Bちゃんの表象と相互作用していった。そのような相互作用は、Bちゃんがいまここで受け入れられているという他者と共にあることの体験になっていったと考えられた。それは、保育者にとって保育が困難と思えた乳幼児が共にあることを体験しあうことができる乳幼児になっていったということであろう。

2. 情動調律によって生じるもの

保育者はいまここにいるBちゃんが臨床乳幼児であるという視点を持てるようになった。そのことで、Bちゃんの感情の波長のほどよい状態のところでは声かけをするなどの微少調律で関わるができるようになった。そのようになったのは、保育者がBちゃんの他者と共にあるという表象を楽しいものとして応答していたからであると考えられた。その後、Bちゃんは、いまここでの共にあるモーメントが心地良いものとして体験され、対象から受け入れられているかを社会的参照によって情報を求めていったのであろう。Stern (1995) によると、乳幼児の主観的視点として、めったに繰り返されない体験よりも繰り返しの体験によって表象は構築され、後に一般化されて原型的な出来事となる。つまり、Bちゃんが保育者と情動調律を繰り返して体験することで、“他者と共にあるスキーマ (schema-being-with-another)” (Stern, 1995) を形成させていったことが推測された。そして、このような表象の構築は、保育者とBちゃん

んのコミュニケイトが間主観的にかかわりあいの領域で作用しているからであると思われた。さらに、保育者の適切な声かけによって、Bちゃんは言語自己感とそのかかわり合いの領域を作用させていくことが、筆者には期待された。

V おわりに

Stern (1995) およびWinnicott (1971) によると、乳幼児は自分のリズムと音色で旋律を生み出している。“援助者がほどよく乳幼児の音楽を聴き、共感で応えれば、乳幼児と互いに認知しあい、心地良く感じられる”(Winnicott, 1971)。それは、援助者が臨床乳幼児の体験している間主観的な事実を乳幼児の主体的世界に向けて語ることである(藤山, 2003)。そのような関わりによって体験される乳幼児の感覚について、Winnicott (1971) は“私がまなざしを向けるとき、私は見られている。そこで、私は存在する。いまや私はまなざしを向けるとともに見ることもできる。それは自分のことを知ってくれている母親を持っていることである”と説明している。この感覚から生じる乳幼児の自発的な身振りに対して、援助者が肯定的に応答すれば、乳幼児は自ら自己感を発展させていくであろう。筆者は、このような情動調律による発達促進的なかかわりが幼児の人との関わりを育むために求められるものであると考える。

文献

- Bowlby J (1969) : *Attachment and loss : Vol. 1. Attachment*. New York : Basic Books. 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子・黒田聖一 (訳) (1976) : 母子関係の理論 1 ; 愛着行動. 岩崎学術出版社.
- Collis G M・Schaffer H R (1979) : *Synchronization of visual attention in mother-infant pairs*. *Journal of Child Psychiatry*, 16, 315-320.
- Emde R N・Sorce J F(1983) : *The Rewards of Infancy : Emotional Availability and Maternal Referencin*.(ed.) Call J D・Galenson E・Tyson R L : *Frontiers of Infant Psychiatry*. New York : Basic Books. pp17-30. 小此木啓吾 (監訳) (1988) : 幼児からの報酬 - 情緒的応答性と母親参照機能 : 乳幼児精神医学. 岩崎学術出版社. pp25-48.
- 遠城寺宗徳・合屋長英 (編) (1977) : 遠城寺式 乳幼児分析的発達診断検査. 慶応通信
- 藤山直樹 (2003) : 精神分析の非対称性について - Winnicott, D. W. の視点から - . *精神分析研究*, 47 (4), 454-459.
- Lebovici S (1984) : *Comments concerning the concept of fantasmatic interaction*. (ed.) Call J D・Galenson E・Tyson R L : *Frontiers of infant Psychiatry, Vol. II*. New York : Basic Books.323-331.吉田豊 (訳) (1996) : 幻想的相互作用, ヒトの意識の誕生. *イマージ*, (7) 1, 86-97.
- 森さち子 (2009) : 乳幼児研究の関係性理論への貢献. *精神分析研究*, 53 (2), 170-178.
- Stern-Bruschweiler N・Stern D N (1989) : *A Model for Conceptualizing the Role of the Mother's Representational World in Various Mother-Infant Therapie*. *Infant Mental Health Journal*, (10) 3, 142-156.嶋田誠 (訳) (1996) : 多様な母親 - 乳幼児治療における母親の表象世界の役割を概念化するためのモデル ; ヒトの意識の誕生, *イマージ*, (7) 1, 106-123.
- Stern D N (1985) : *The Interpersonal World of Infant*. Basic Books : New York. 神庭靖子・神庭重信 (訳) (1989/1991) : 乳児の対人世界 理論編・臨床編. 岩崎学術出版社.
- Stern D N (1995) : *The motherhood constellation : a unified view of parent-infant psychotherapy*. Basic Books : New Yor. 馬場礼子・青木紀久代 (訳) (2000) : 親-乳幼児心理療法 : 母性のコンステレーション. 岩崎学術出版社.
- Trevarthen C (1979) : *Communication and cooperation in early infancy: a description of primary intersubjectivity*. (ed.) Bullowa, M : *Before speech : The beginning of interpersonal communication*. Cambridge : Cambridge University Press.321-347.
- Tustin F (1990) : *The protective shell in children and adults*. London : Karnac Books.
- Winnicott D W (1971) : *Playing and Reality*. London : Tavistock. 橋本雅雄 (訳) (1979) : 遊びことと現実. 岩崎学術出版社.

Abstract

In this research, a psycho-educational approach was taken to nurture the relation with the infant as a person in the infant-education center. A psycho-educational approach was taken by applying one of the models of the supportive approach. This was a model for analyzing the dynamic interaction in the mother - infant relationship. Moreover, I used the affection attunement according to Stern and the theory of protonarrative envelope in order to understand the infant's feelings. The understanding of the infant by the protonarrative envelope was utilized also in consultation with the nursery teacher. First, the infant's behavior was recorded with a video camera. Next, the principal of the day nursery classified into several envelopes the feelings of the individuals which formed the protonarrative envelope from the video record. Then, using each feeling envelope the affection was evaluated with the nursery teachers. As a result, when nursery teachers were affectively tuned by the infant's spontaneous gestures, the infant developed a sense of self by itself. I considered that the infant nursed in the infant education center was provided with affective attunement.

Keyword : affective attunement, protonarrative envelope, bring up the relation with the infant as a person